

移動する家族の生活史

— 旧産炭地を事例として —

永吉 守

(NPO 法人大牟田・荒尾 炭鉱のまちファンクラブ運営委員 /
福岡工業大学、他、非常勤講師)

木村 至聖

(日本学術振興会 特別研究員)

有蘭 真代

(日本学術振興会 特別研究員)

井上 博登

(早稲田大学大学院人間科学研究科 博士後期課程)

中島 満大

(京都大学大学院文学研究科 博士課程後期課程 / 日本学術振興会 特別研究員)

西牟田 真希

(関西学院大学大学院社会学研究科 博士課程後期課程)

2010年2月



京都大学グローバル COE

「親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点」

Global COE for Reconstruction of the Intimate and Public Spheres in 21st Century Asia

〒606-8501 京都市左京区吉田本町 京都大学大学院文学研究科

Email: intimacy@socio.kyoto-u.ac.jp URL: <http://www.gcoe-intimacy.jp/>

※諸事情により、WEB上では「はじめに」「むすびにかえて」のみの掲載とし、フルペーパーの掲載は遠慮させていただいております。本報告書は、発行後に大牟田市立図書館、長崎市立図書館等に寄贈させていただく予定ですので、ご覧になりたい方はそちらにアクセスしていただくと幸いです。

はじめに

本報告書は、京都大学グローバルCOEプログラム「親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点」次世代研究ユニット「移動する家族の生活史——旧産炭地を事例として」(代表：永吉守、幹事・世話人：木村至聖、2008年度)の共同研究の成果である。

近年は、産業遺産への関心の高まりなどもあり、近代化の原動力であった石炭産業、炭鉱(社会)というものが、人々の暮らしや社会にどのような影響を与え、またその終焉が何をもたらしたかについて、再評価する機運が高まっている。しかしながら、現在ではこうした産業構造物などの「モノ」が少しずつ注目されはじめた一方で、実際に炭鉱社会で働き、生活した人々がどのように生活し、どのように働き、どのような思いでいたのかということに十分に光があたっていない。だが実は炭鉱施設などの産業遺産としての価値とは、「モノ」そのものの価値である以上に、むしろそれに関わる人々の豊かな体験とその「語り」があってこそ生まれるものなのではないだろうか。産業遺産とはこうした人の営みや思いと結びついてはじめて、守り伝えていくべき記憶や価値となっていくのである。

そこで本研究では、かつて炭鉱のあった地域に住んでいる方、また住んでいた方に、当時の炭鉱での生活の様子、とくに記憶に残っている思い出やエピソードなどについて話していただき、その内容をここに炭鉱の生活史としてまとめた。

本報告書の構成は以下の通りである。第一部は三池炭鉱、第二部は端島炭鉱の事例を扱っており、それぞれ「炭鉱の仕事」、「炭鉱をめぐる生活・社会」、「炭鉱で暮らした記憶」という三つのパートで構成されている。ここまでの多くの方々のお話を簡単に総括することはできないが、第三部ではこれらの語りに基づき、そこから得られた知見を整理し、これまでの炭鉱社会の先行研究のなかに位置づけ、今後の研究課題を明確化する。さらに、本研究の中心課題である炭鉱社会での生活の聞き取りという趣旨からは少しはずれるものの、炭鉱社会への多角的な視点を担保し、次年度以降の研究へと展開するための足がかりとして、いくつかの論文や聞き取りを附録として収録した。

本来、生活史は何度も聞き取りを重ねた上でまとめられるものだが、このプロジェクトでは、もともと半年という非常に短い期間での調査という時間的予算的制限があったため、大半のケースは一度きりの聞き取りに基づいて作成された。そのため、本来尋ねておくべき項目の聞き落としなど、不十分な箇所が多々あると思われる。これについては、インタビュー後に初稿を作成し、話者に原稿のチェックをお願いし、聞き間違いや事実の誤認等がないか確認していただいた上、改めて執筆者がそれを修正することで、できる限りフォ

ローを試みた。もっともこの過程で、執筆者の力量不足等で話者に納得していただける原稿が作成できなかったなどの理由で、残念ながら掲載に至らなかったお話もある。

本報告書は、プライベートな事柄をお聞きしたにもかかわらず、本研究の趣旨を理解していただき、未熟な我々に最後までつきあってくださった話者の方々のご協力なしには完成しなかった。ご協力いただいたみなさまにこの場をお借りして、厚く御礼申し上げます。

付記：

なお、第二部「野母からみた端島」および「高浜からみた端島」の論稿においては、個人個人の語りをもとに生活史を詳述するというスタイルはとらなかったが、調査においては野母のみなさま・高浜のみなさまにご協力をいただいた。重ねて厚く御礼申し上げます。

本研究では、主に日本の戦後社会の近代化・工業化という急激な変化のなかで、炭鉱社会で暮らした家族がいかなる生を営んできたのか、主に生活史という方法を通して描写してきた。それは「はじめに」で述べた通り、半年間という限られた期間で行なうにはあまりに壮大なテーマでもあり、本研究で実施することができたのは、そのごく一部に過ぎない。また、例えば、旧三池炭鉱における、三池争議の結果退職した三池労組員とその家族の移動など、調査上の限界から、話を聞くことのできた語り手の属性などに偏りが出てしまったことも否めない。だが、実際に話者のみなさまやNPOの協力のもと得られた、この豊富な語りそのものが、本研究の達成することのできた最大の成果であるといえるだろう。

本報告書では、第一部で三池炭鉱、第二部で端島炭鉱の事例を扱ったが、それぞれのパートで得られた知見については小括で整理しているので、ここでは2008年度の調査および本報告書作成の中で得られた知見を、これまでの炭鉱研究における位置づけ、およびプログラム全体の「親密圏と公共圏の再編成」というテーマとの関連において考察してみたい。その上で、今後明らかにしていくべき研究課題についても検討する。

1 親密圏／公共圏の混合体としての「炭鉱社会」

「炭鉱社会」と一口に言っても、実際に炭鉱社会で暮らしたことのない人々にとっては、ある種の定型的なイメージがいくつか存在する。たとえばかつては『青春の門』などに描かれる任侠的な世界のイメージ、もしくは筑豊の文学作品における「底辺労働」と「(労働運動に)立ち上がる労働者」といったイメージ、また近年では、映画『東京タワー』、『フラガール』などにより、「家族のような」親密な一体感を持ったコミュニティとしての炭鉱社会のイメージも親しまれつつある。

本研究が取り扱った三池炭鉱、端島炭鉱は、いずれも中央財閥系の炭鉱であり、紹介した事例の多くは「戦後」の炭鉱社会の様子について語られたものである。これらの事例をみると、社宅（炭鉱住宅）での親密であたかも家族であるかのような付き合いについての語りややはり多くみられる。戦後の苦しい状況下、引き揚げ者や農家の二男三男といった人々が、住宅や食事の保障に惹かれ、全国から炭鉱に集まってきた。そのようにさまざまな出身や属性の人々が集まったにもかかわらず、あるいはそれゆえに、社宅に集まって暮らしていた家族たちは、お互い助け合い、励まし合いながら暮らしてきたという語りである。

それでは、こうした「炭鉱社会」の性質はいつ頃からいかに形成され、どの程度広く共通してみられるものなのだろうか。武田良三（1963）は、炭鉱住宅とそれを管理する世話所などに特徴づけられる、「人為的共同体」としての炭鉱社会の姿を福島県常磐炭鉱を事例として描き出し、労使関係、生活様式、周辺地域との関係について分析している。また布

施鉄治編（1983）は、北海道夕張炭鉱における 1973 年からの調査に基づいて得られた個々の労働者の生活史を通して、巨大な独占資本が炭鉱労働者三層（職員、直轄鉱員、組夫）、周辺の自営業者、誘致企業労働者、生活保護世帯、自治体職員、そして労働者の家庭生活にどのような影響を及ぼしたかを詳細に分析している。これらは常磐、夕張といったそれぞれの「炭鉱社会」の特徴を詳細に分析した重要な研究である。

しかしながら、これらの研究は個々の「炭鉱社会」間の相違に着目した研究ではない。経済学者の荻野喜弘（1993）が指摘しているように、1930 年代以降、鉱夫統轄のあり方の差異などにより、中央財閥系炭鉱、地場大手企業の炭鉱、中小炭鉱では、異なる世界が形成されてきた。市原博は、こうした差異を認めた上で、「炭鉱社会」の地域をこえてみられる特徴を、幕末期から戦後 1950 年代までの一世紀にわたる分析を通してとらえようとしている。市原によれば、戦前における「炭鉱社会」の形成は、親分子分関係を軸とする自立的な結合関係の下にいた炭鉱夫たちが、炭鉱経営側による従業員団体の組織化、労務管理施策の拡充などにより、経営秩序に適合的なものへと徐々に包摂されていく過程であった。さらに戦後においては、こうした過程を前提として、炭鉱夫たちの人格的結合関係の伝統的な緊密性が引き継がれ、それが労組主導で編成替えされたものが、いわゆる「炭鉱社会」を形成していったと結論している。そして、こうした職業を範囲とする人格的結合関係というものは、工業化時代において炭鉱以外にも共通してみられる特徴であったことを指摘している。

このように、職業による人格的結合というものが、工業化時代の社会の顕著な特徴としてみられるが、炭鉱社会ではそれがもっとも早い時期から、非常に先鋭的なかたちであらわれていたのである。また、日本の場合はその特徴がイギリスのように対立的な「階級」の形成には帰結せず、次第に経営側に包摂されるかたちで自己完結的な社会を形成したことも特記すべきであろう。こうした自己完結的な社会では、企業組織と労働組合によって厚い福利厚生が実現しており、地域コミュニティ、企業組織、家族といった要素が混然一体となって存在していたのである。そうした意味で、「炭鉱社会」においては親密圏／公共圏の厳然たる区別は存在しなかったといってもよいだろう。

だがここで忘れてはならないのは、国家の位置づけであろう。戦後に完成をみた「炭鉱社会」の親密性・自己完結性も、国家の石炭政策のもとで保護されてきたものである。「炭鉱社会」は、いわば企業組織を介した国家の間接的な福祉の恩恵に与ってきたと言えるだろう。しかしながら、石炭から石油・原子力へといったエネルギー革命、産業構造の転換、脱工業化の進展とともに、国家による産業の保護が撤退し、「炭鉱社会」は解体へと向かっていったのである。

2 「炭鉱社会」の変質と解体

本研究が取り扱った三池炭鉱、端島炭鉱の炭鉱社会の記録は、こうした戦後の親密な自己完結的な社会の完成から、その解体という時期に重なっており、そこで働き、生活した

人々がその変化をいかに経験したのかということを物語っている。

まず、ここで紹介した、社宅での暮らしへの評価の語りからは、「炭鉱社会」の保護主義的側面が、また同時に管理主義的な側面も合わせもっていたことがうかがえる。さらに、三池炭鉱の事例からは、管理主義的抑圧に対抗するはずの組合活動があまりにも政治運動化し、それ自体が管理主義的になっていたという実態も垣間見える。こうした状況においては、炭鉱労働者とその家族としてどのような立場をとるにしても、社宅での暮らしを非常に心地よいものと感じた人々や家族ぐるみで労働運動に参加していった人々もいた一方、それらを息苦しく感じた人々がいたことも、本研究が得た多様な語りから明らかになっている。

また、端島の事例ではみられないが、三池の事例で顕著なのは、いわゆる三池争議（1959～1960年）の影響である。これによって、親密だったコミュニティは第一組合（三池労組）、第二組合（三池新労組）に分裂してしまい、人々の心に大きな溝をつくってしまうことになる。このことが、同じ組合員の多い地域への「引っ越し」や、「疎開」を引き起こし、争議後は三川坑炭じん爆発事故の影響や炭鉱労働の機械化で労働人員合理化が進み、社宅施設そのものが余剰資産となっていったという事情もあいまって、次第に炭鉱労働者とその家族以外の人々（関連会社や下請会社など）も社宅に受け入れるようになった。さらには、昭和後期から閉山直前においては、入出坑口が統廃合されることによって、通勤距離が遠い社宅から別の社宅へと移動したり、経済的にある程度豊かになった時点で一戸建ての住宅を構えたりするパターンも多くみられる（永吉 1998 など参照）。こうした事情から、地域は再編されていったのである。その結果、三池の例をみれば、親密だったコミュニティは閉山に近づくにつれ次第に他のブルーカラーやホワイトカラーの家庭における暮らしとさほど変わらないような人間関係へと変容していったのである。

そして、炭鉱社会すべてに共通してみられるのが、炭鉱の閉山という出来事である。端島の場合は、この炭鉱閉山によって親密なコミュニティはきわめて短期間に解体し、そこで暮らした人々は再就職、移転によって、また新しい生活環境を求めなくてはならなくなった。それは炭鉱で働いた人々に限らず、端島からの現金収入に大きく頼っていた周辺地域の人々も、新たに創意工夫を凝らして生き残っていく術を模索しなければならなかったのである。

3 炭鉱社会の「家族」という視点と今後の課題

本研究の聞き取りでは、炭鉱社会（の変化）の経験を語る際の重要な要素として「家族」に注目する視点が重要であることがひとまず明らかになった。三池の事例でいえば、まず戦後の復員、引き揚げ者が単身で炭鉱にやってきた後、住宅事情が整ってくるにつれて、家族を呼び寄せ、社宅に定着するというプロセスがみられる。さらに、三池争議の際、ストを闘いぬぐために家族で支えあったり、第二組合（三池新労組）に移る契機として家族の意見が重視されたことなどは、企業組織と労働組合の二重の保護／管理下に置かれた「炭

鉱社会」の息苦しさや、そこで生まれた軋轢などに個人が直面したとき、「家族」というものが重要な拠り所として機能していたことは特筆すべき点である。

また、端島のいくつかの事例は、親密圏／公共圏の混合体としての炭鉱社会を理解する上で非常に興味深いものである。すなわち、端島は島全体が社有地であったため、その社宅に住む資格を得るためには、家族の誰かしらが会社の関係者でなくてはならなかった。その資格を得るため、養子縁組や再婚などによって、「家族」の形態を柔軟に変化させて対応したという語りは、「炭鉱社会」を生きてきた家族の生き残り戦術を鮮やかに浮き上がらせてくれる。さらに、端島と近隣コミュニティである高浜、野母の間でも、さまざまなヒト・モノ・カネ・「文化」の移動があったことが示され、必ずしも「炭鉱社会」が閉鎖的な社会であっただけではないことが読み取れる。

もっとも、本研究が主な調査地として選んだのは、いずれも中央財閥系の旧三池炭鉱と旧端島炭鉱だったことも指摘しておかなければならない。それゆえ、地場大手炭鉱である筑豊貝島の事例（高橋編 1994; 2002）や常磐炭鉱の事例（正岡他 1998）との比較も今後の課題として検討していく必要がある。また、同じ中央財閥系の炭鉱の事例であっても、それぞれの「炭鉱社会」に大きな差異を生み出しているのが、「組合」の性質の違いであることが推測される。すなわち、強力な闘争方針をとる日本炭鉱労働組合（炭労）系の三池労組と、労使協調路線の全国石炭鉱業労働組合（全炭鉱）系の端島労組の活動の方向性の違いである。本研究で注目した「家族」という要因に加え、こうしたいくつかの要因による炭鉱社会の性質の違い、そしてそこで働き、生活した人々の経験の差異について、今後もさらなる比較検討を行なっていきたい。

4 今後の課題とまとめ

このように、炭鉱社会を「親密圏／公共圏」という視点から位置づけなおすと、国家、企業組織、労働組合、そして地域コミュニティ、家族といったものが重なりあっていたことが明らかとなった。「炭鉱社会」の解体は、こうした重層的な社会の解体であり、脱工業化後の「親密圏／公共圏」の分離を意味していたと考えられる。今後の課題としては、引き続き各地域のさまざまな「炭鉱社会」に注目し、それらの要素の重なり合いの様態を分析しつつ、脱工業化後のそれらの地域社会、家族の変容のゆくえを検討していく必要があるだろう。

また、こうした視点からみると、炭鉱社会の記憶の語りの継承と保存というものもまた、「親密圏／公共圏」の接触領域を再編していく営みであることがわかる。語り手がかつての生活や家族について「語る」という行為や筆者らがそれらを記録し伝達していく行為は、かつては炭鉱社会成員内部に共有されていた経験を「公共圏」へと開いていくという行為なのである。語り手にとっては、日常生活や家族のことについては私的傾向が強いのは当然であるが、三池炭鉱、端島炭鉱どちらにしても、炭鉱社会に存在していた親密圏／公共圏は、直接的な経験に伴うさまざまな感情の残存を伴いながらも、すでに歴史的なものに

なりつつあり、多くの語り手にとってはノスタルジアとして語られる傾向が強い。もっとも、三池の場合、その感情の残存が現在の地域全体の再生において正負双方の影響を及ぼしていることもまた事実であろう。

いま、近代社会の大きな転換点に立っている私たちが、「近代社会」とは何だったのかと問うとき、たんに経済的観点や技術的観点からのみそれを評価するだけでは、「近代社会」の全体像は決してみえてこない。そこで、企業組織や家族、地域が重層的に絡み合っていた「炭鉱社会」を生きた人々の経験から学ぶことを通して、人間にとっての「近代社会」の意味を問う「公共圏」が、ようやくそこにみえてくるのである。

近年では、旧三池炭鉱や旧端島炭鉱（軍艦島）の遺構が、「九州・山口の近代化産業遺産群」としてユネスコ世界文化遺産暫定一覧表に記載されており、近い将来、それらが「世界遺産」となる可能性も高い。しかし、炭鉱施設などの「モノ」そのものに価値があるわけではなく、それらが生きた人々の豊かな「語り」と結びあわされてこそ、遺産としての価値が生まれ、訪れる人々の感動を呼ぶのである。本報告書がそのための一助になれば幸いである。

参考文献

- 布施鉄治編, 1983, 『地域産業変動と階級・階層——炭都・夕張／労働者の生産・労働——生活史・誌』御茶の水書房
- 市原博, 1997, 『炭鉱の労働社会史——日本の伝統的労働・社会秩序と管理』多賀出版
- 正岡寛司・藤見純子・嶋崎尚子・澤口恵一, 1998, 『炭鉱労働者の閉山離職とキャリアの再形成——旧常磐炭鉱 KK 砒員の縦断的調査研究, 1958～2000 年—Part I』早稲田大学人間総合研究センター
- 永吉守, 1998, 「ライフ・ヒストリーにみる炭鉱労働者像—閉山間近の三井三池炭鉱労働者の「語り」より—」『熊本大学文化人類学調査報告』2 熊本大学文学部 1-96
- 荻野喜弘, 1993, 『筑豊炭鉱労資関係史』九州大学出版会
- 高橋伸一編, 1994, 『離職者の生活史研究——元炭鉱労働者を中心に』文部省科学研究費補助金研究成果報告書
- 編, 2002, 『移動社会と生活ネットワーク——元炭鉱労働者の生活史研究』高菅出版
- 武田良三, 1963, 「炭鉱と地域社会」『社会科学討究』8(2・3)

2008 年度次世代研究「移動する家族の生活史 ― 旧産炭地を事例として ―」（研究代表：永吉守）による成果である。

【メンバー】（ ）内は 2008 年度プロジェクト時点

永吉守（NPO 法人大牟田・荒尾 炭鉱のまちファンクラブ理事 / 福岡工業大学、他、非常勤講師）

木村至聖（京都大学大学院文学研究科 博士後期課程 / 日本学術振興会 特別研究員）

有菌真代（京都大学大学院文学研究科 博士後期課程）

井上博登（早稲田大学大学院人間科学研究科 博士後期課程）

中島満大（京都大学大学院文学研究科 修士課程）

西牟田真希（関西学院大学大学院社会学研究科 博士課程後期課程）